et faibles», ils vinrent nous prendre.

と譯せり、此の如く此の一節に就きては、兩氏は既に原文の音譯（transcription）に於て互に考を異にする點あれば、其の解釋の互に相異れるは止むを得ざる所なれども、然も初頭の三語卽ち üč-oγuz süsi は兩氏共に同樣に讀みながら、前者は之を三〔姓〕Oγuz の軍（Das Heer der ütsch-Oguz）と譯し、後者は Oγuz の三軍（trois armées Ogouz）と譯せり、さて此等の兩解釋はいふ迄もなく斯學に於ける兩大家の譯せる所なれば、文法上よりすれば共に誤と認むべきに非ず、「三〔姓〕Oγuz の軍」とも見得ると共に、「三〔隊〕の Oγuz の軍」とも認めらる、されば之が決定はたゞ前後の文勢に依賴するの外無し、此の一節を前節と續くる時は、『春余は Oγuz に對して軍を出せり、第一軍は出陣し、第二軍は家に在りき、「Oγuz の三軍は攻め來れり」（或は三姓 Oγuz の軍はいへり）』と記さる、然るに此の初めに記さるゝ Oγuz なるものは、前來屢〻默棘連可汗と相戰へる Oγuz 卽ち Toquz Oγuz なること勿論なれば、次に現はるゝ üč oγuz süsi なる語も、三姓 Oγuz の軍と見るよりも、Oγuz の三軍と解するを以て妥當なりとせざる可らず、üč Oγuz なる語が現はるゝは、すべての碑文中此の一ケ所に止ることも、また之を三姓 Oγuz と解すべきに非る一證と見るを得べし、かゝれば余輩は Hirth 氏が之を以て三姓葛羅祿に相當せしめたるに就きても、勿論賛意を表する能はず、Barthold 氏が「（恐らくは碑文には全く記されざる）Ütsch-Oghuz が Qarluq と同一のものなりとする Hirth の見解は信ず可らず（Altt. Inschr. u. d. arabisch. Quellen, S. 20.）といくるに賛せんとす、Marquart 氏も此の一節の解釋につきては全く Thomsen 氏に從ひ、die drei Heerhaufen der Oγuz (Chronologie, S. 54) と記せり。